三直貝塚の遺構分布と盛土遺構の断面

吉　野　健　一

1．はじめに

三直貝塚は君津市三直字新関に位置する縄文時代の中期から晩期の遺跡である。1999年から2001年まで，館山自動車道建設にともない，千葉県文化財センターにより遺跡の東側が発掘調査された。その結果，縄文時代中期後葉から晩期にかけての集落とそれに伴う住居跡，土坑，盛土遺構，斜面整形遺構，貝層などが検出された。特に盛土遺構は，この遺跡を特徴付ける遺構として，集落や貝層との関連を含めて，注目された。

この発掘調査時の成果については，２度の現地説明会，2000年の千葉県立中央博物館での講演会，2002年１月の千葉県遺跡調査研究発表会において発表が行われ，その内容は吉野（2001，2002）として公表されている。

またその後，2001年，2002年の２度にわたり，君津市による遺跡範囲の確認調査が行われており，千葉県文化財センターによる調査では，調査対象外であった遺跡西側についても，地形測量調査と貝層の分布をとらえる調査が行われ，それにともない，狭い範囲ではあるが，トレンチ調査が行われた。その成果については，一部，君津郡市文化財センター（2002）に公表されている。

三直貝塚については，このように調査の段階からその成果を公表してきたが，その内容は，断片的であり，この遺跡を最も特徴づける盛土遺構の構造などについては具体的に図示したものがないなどの問題点があった。そのため，三直貝塚の調査以降に，いくつかの類似する遺跡の調査が行われたが，三直貝塚で得られた知見を得る手段がないために，調査を担当された方々にストレスをかけることも多かったように思う。

また，調査終了から２年ほど経過し，千葉県内でも佐倉市井野長割遺跡や，四街道市八木原貝塚などの盛土遺構を伴う縄文時代後晩期遺跡の調査が行われ，新しいデータが提示され，盛土遺構の研究が進みつつある（小倉2001，2002，阿部2002）。

このような状況の中で筆者は，三直貝塚の遺構分布や盛土遺構の断面図といった基礎的なデータを整理作業の進捗に合わせて公表してゆく必要があると考え，本稿を起こすことにした。そのため，三直貝塚における盛土遺構の性格や成因など，遺跡の位置付けを行う論証は，本稿では取り扱わず，あくまでも状況を把握し，整理することを目標とした。また，ここで示される図については，遺構の詳細な配置など，まだ調整が必要であり，後日刊行される本報告によって改変される可能性が多分に含まれていることをあらかじめご了承頂きたい。

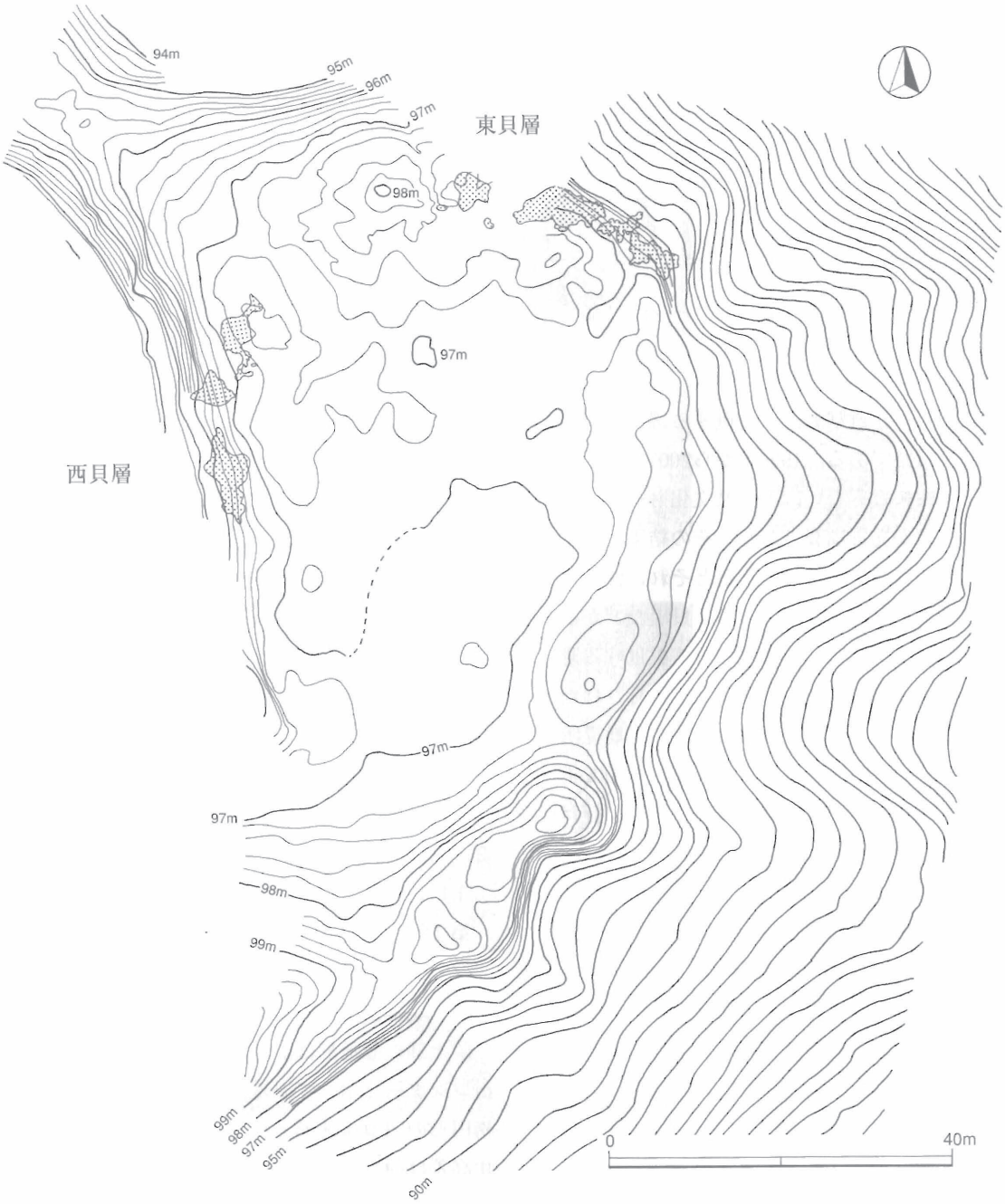
2．遺跡の構成

（1）地形

第１図は，吉野（2002）と君津郡市文化財センター（2002）を合成して作成した遺跡全体図である。等高線は，現地表面において測量したものを用いている。丘陵上部の微地形は20cmコンターで示し，斜面部は１mコンターで示している。現地表面では，南北に長い楕円形の凹地状地形となり，凹地と北側の最高部との比高差は約1.2m，南側との比高差は約２mである。

集落の南西側には，谷状の地形が入り込んでおり，その谷頭部分は，環状貝塚における，いわゆる「開口部」となっている。この地形は，千葉県文化財センターの調査が行われていた時点では，西側の崖の土取りが行われた時に形成された可能性があるという見解を示していた時期もあったが，君津郡市文化財センターの調査により，樹木の伐採が行われた時に観察した様子では，近年に作られたものではなく，集落が営まれた時期から存在したものであると推測された。つまり，集落中央の凹地は，南西側の谷に向かって開口する地形であったと想定されるのである。

また，西側の崖面は，土取りによる影響が大きく，旧地形が大きく改変されているのではないかと，当初は想定されていたが，貝層が西側の急斜面の肩部に至



第１図　三直貝塚の地形と遺構分布図
（吉野2002，財団法人君津郡市文化財センター 2002より作成）

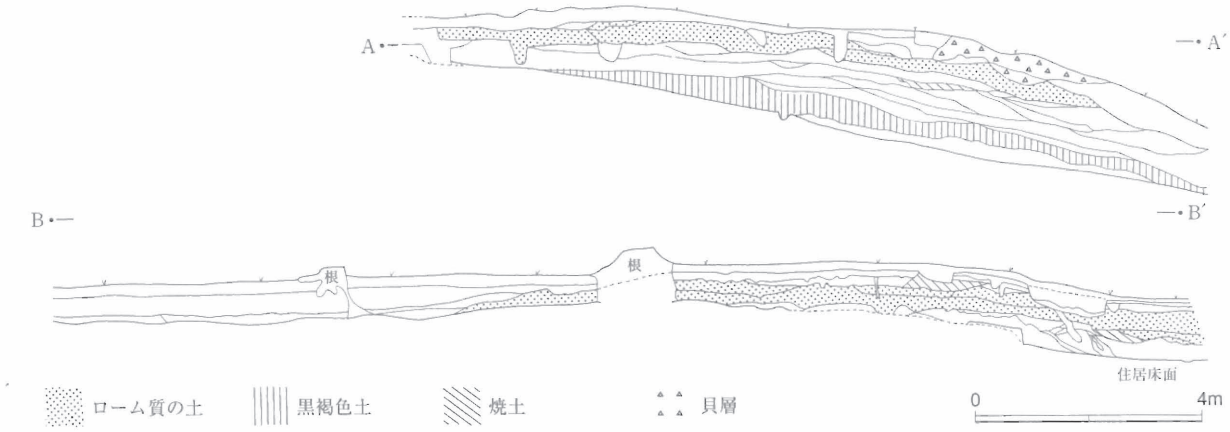
るまで分布することから，少なくとも丘陵上平坦面においてはそれほど土取りの影響を受けてはいないということが明らかになった。だがその一方で，崖面に地山が露出し，そこには炉の断面のような焼土が確認されたという知見もあることから，この地点は，現在ほどの急な崖ではなく，斜面盛土の裾部が続いていたもの想定される[1]。

（２）貝層の分布と規模

貝層は北側から西側にかけて点在している。発掘調査によって東側の盛土中にも径１ｍ未満の貝ブロックが検出されている。貝層の規模はそれほど大きくはなく，地点貝塚が丘陵縁辺の高まりのピークから外側に分布しており，貝層の裾は斜面にかかるようになっている。貝層分布の平面形態は，点列環状貝塚と呼ぶことができるであろう。

貝層は凹地状の地形を取り囲むように分布しているが，凹地の南東側が谷頭に向かって開口していることから，下総台地上に見られ，環状貝塚が形成されるような皿状の地形とは異なっている。遺跡が立地する丘陵には南東側，東側，北東側，北側から谷が集まって

第２図　三直貝塚遺構分布概念図（吉野2002に加筆）



第３図　北側斜面，東側斜面の盛土遺構断面
（断面の位置は，第２図中に記されている）

いるが，必ずしも谷頭と貝層の位置の明確な因果関係が認められないことから，貝塚の形態としては，地滑りによる箱形地形や先導谷を取り巻く堤状部を中心に貝層が形成される「第２形態の点列環状貝塚」（日暮1999）に分類することができるであろう。

千葉県文化財センターの調査時に，貝層下から焼土が面的に広がる地点が確認されており，住居跡が存在した可能性が高いことから，これらの地点貝層のいくつかは住居内貝層である可能性がある。貝層の厚さは，北側の貝層においては，最も厚いところでも１ｍは超えない。貝層の規模としては，東京湾東岸に分布する縄文時代後晩期の貝塚の中では，小規模なものであるということができる。

（３）盛土遺構

調査を行っている時点では，南側や北側の斜面に分布する，厚さ約２ｍを超えるような土砂の堆積を「斜面整形遺構」平坦面に分布する凹地を囲む高まりを「環状盛土遺構」と便宜上呼んでいた。しかし，井野長割遺跡の盛土遺構が台地上よりも斜面に厚みがあり，両者が連続していることや，盛土の堆積状況には様々なパターンが存在することが予測されることから，台地平坦面にある盛土と斜面の堆積を分離する表現方法が，それほど意味を持たないと判断し，ここでは両者ともに盛土遺構と呼ぶことにし，その中でのバリエーションとして，とらえることとする。

１）南側の斜面

南側の斜面の盛土遺構は，最も厚い部分で約2.5ｍを測る。表土の下には①黒褐色土，その下にはやや暗い②黄褐色土が，その下には厚さ約１ｍの③暗褐色土が，そしてその下には④黒褐色土の堆積が見られる。③暗褐色土には，さらにロームブロックを多く含む層や，土器片が集中して入る層が間層として入る。③は全体的に，焼土，炭化物，土器片を多く含んでいる。

それぞれの層と遺物の時期との対比は，表土から①は安行１式から晩期安行式，②は加曽利Ｂ式，③は堀之内式，④は堀之内式に加曽利Ｅ式が混入するといった状況である。

③暗褐色土が，人為的に移動された土のような様子が強いのに対し，④黒褐色土は，緻密で粘性があり，極めて堅く，自然堆積土であるような様子である。しかし，遺物を含むことや，少量ではあるが焼土や炭化物の粒子を含むこと，さらにこの層の下から炉跡やピットが検出されることから，人為的な作用を排除することはできない。④層と，その下にみられるローム質土との層界には，断面から巻き上げ状の部分が見られ，土が動いていることが想定される。

また，平面的には明瞭に観察できなかったが，断面から，地割れ状の溝がいくつも確認でき，層位の混乱が見られる箇所も存在した。

２）東側の平坦部

東側の住居跡のひとつであるSI－022から北側に，厚さ１ｍ以上の盛土が確認された。SI－022，SI－029，SI－038などはその一部を構成しているといってよい。SI－038の北側には厚さ約１ｍのローム質土の盛土が確認され，それが東側斜面の加曽利Ｅ式から堀之内式期の住居群を覆うように分布していた（第２図）。加曽利Ｅ式期の住居跡であるSI－035は，ごく薄い暗褐色土で埋まった後，厚いローム質土で埋められたように見える。ローム質土は，縁辺部分では，暗褐色土の堆積との境目が不明瞭となるが，中心部分では，きわめ

て均質なソフトロームのように見える。ローム質土の上部にはピットや，加曽利B式～晩期の土器が分布する面が存在する。ローム質土の中からは炉跡が検出されていることから，この土層が必ずしも一度の堆積で完成されたのではないと考えられる。

3）北側の斜面

前にも述べたように北側の斜面には貝層が確認されている。地山はなだらかな斜面を形成しているが，その上に厚さ約2mの土砂の堆積がみられる。堆積の状況は，表土の直下に①黒色土，その下からは②貝層，貝層の下に③黄褐色土，黄褐色土の下には④暗褐色土，最下層には⑤黒褐色土となっている。③黄褐色土は②貝層の下としたが，貝層東側の地点では，黄褐色土が混入した純貝層に近い貝層が検出されていることから，黄褐色土が堆積した時期に貝層も形成されていることがうかがえる。また，薄いブロック状の貝層が④暗褐色土の中からも検出されている。

黄褐色土は，よごれたローム質の土で，地点によって茶褐色に見えた。断面の貝層下に見られる薄くほぼ水平な堆積は，焼土と炭化物の層で，住居跡の床面である。この地点の出土遺物の特徴として，獣骨が多いことがあげられる。貝層中からはもとより，その下の黄褐色土，暗褐色土からも検出される。最下層の黒色土層にも骨片が混入する。これらの土層中の骨は比較的脆く崩れやすかった。

各層の形成時期は，表土，①黒色土からは，安行1式～晩期の遺物が検出される。②貝層，③黄褐色土からは加曽利B式土器が，④暗褐色土からは堀之内式土器が，⑤黒褐色土からは堀之内式から加曽利E式土器が検出される。④暗褐色土中の貝ブロックは堀之内式期のものである。

4）住居跡がローム質土によって埋められたときに形成された盛土

SI－004，SI－022，SI－028，SI－029といった住居跡はいずれも，床面直上には数cmから10cmの厚さで炭化物を多く含む黒色土が堆積し，その上にほぼ均質なローム質土が住居を満たすように堆積していた。

SI－004が安行2式から3a式，SI－022が安行1式，SI－028が加曽利B式，SI－029が安行3a式である。SI－028は，一部ハードローム状の土で埋められていたが，他の住居はソフトローム状の土によって埋められていた。床面上の黒色土からは遺物の出土が見られるものの，ローム質土の中からはほとんど遺物が出土しない。ローム質土の堆積の上面は，SI－022においては，上面からのピットの掘り込みが確認された。SI－028，SI－029は，上面から別の住居跡が確認された。

埋められた状況は，いずれの場合も類似しており，同じような過程を経て埋められたと考えられる。これらの住居跡はいずれも遺跡の東側から南東側に分布している。

（3）集落と住居跡

三直貝塚の集落は，遺構の分布が希薄な中央の広場状の部分と，遺構の分布が密な部分によって構成されている。さらに，遺構が密な部分においては，縄文時代後期中葉以降の遺構分布を見ると，北側のピットが集中する地点と，南東側の掘り込みが深い住居が分布する地点に二分できる。

1）北側のピット集中地点

北側のピットが集中する地点においては，明瞭な掘り込みが確認できる住居跡がほとんど検出されない。この地点は，盛土遺構の発達は弱く，土砂の堆積は斜面と比較すると弱い。丘陵上面からは加曽利B式期以降の遺物が多く出土しており，所々に晩期の遺物が集中する地点が存在する。住居跡の可能性もあるが，明瞭な炉跡は必ずしも確認できる場合ばかりではない。晩期の遺物集中地点は，炭化物や焼土なども混入して検出される。

この地点周辺からは，古代の墓跡と考えられる炭化材，骨片，土師器の出土する土坑が数基検出されている。また，古代以降と想定される耕作痕もローム層上面に確認できることから，弥生時代以降の攪乱により遺構が破壊された場所も存在するものと推測される。

しかし一方で，晩期の遺物集中地点からは，大きく攪乱を受けた痕跡はみられず，その下から多量のピットが検出されることから，弥生時代以降に大規模な破壊があったとは考えにくい。

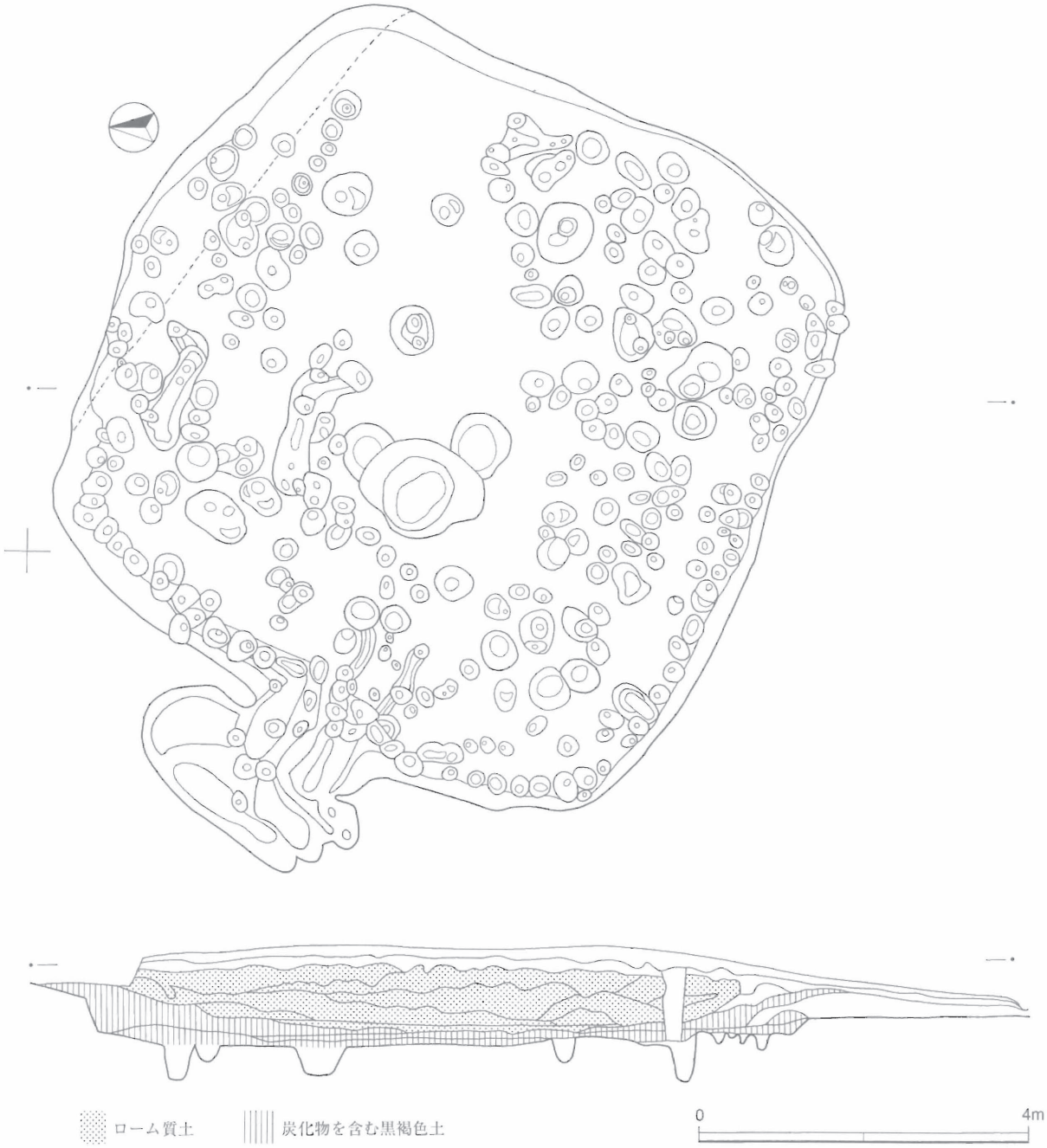
2）南東側の掘り込みの深い住居群

掘り込みの深い住居は，長辺が約10mを超えるものもあり，大型のものが多く，小型のものは少ない。プランは営まれた時期によって形が異なるようである。

住居跡の床面には多くのピットが検出される場合が多い。検出されるパーツからみられる住居跡の構造は，次のようである。

a．ピット

柱穴には，主柱穴と，壁柱穴，そして入り口ピットがある。主柱穴は，安行式のものは4本もしくは，6本で，安行1式段階では4本で，安行2式から晩期のものは6本である。6本の場合は，亀甲形に並び，1



第４図　SI―022Ａの平面図と土層断面図

本は入り口ピットのすぐ近くに位置する。

壁柱穴は，壁際に密に並び，周溝状の落ち込みを伴う場合がある。

入り口ピットは，プランが長楕円形のピットが組み合わさっている。壁にほぼ直行する２本のピットがあり，さらにそれに直行する方向（壁に平行する）のピットが１本以上存在する。

ｂ．炉跡

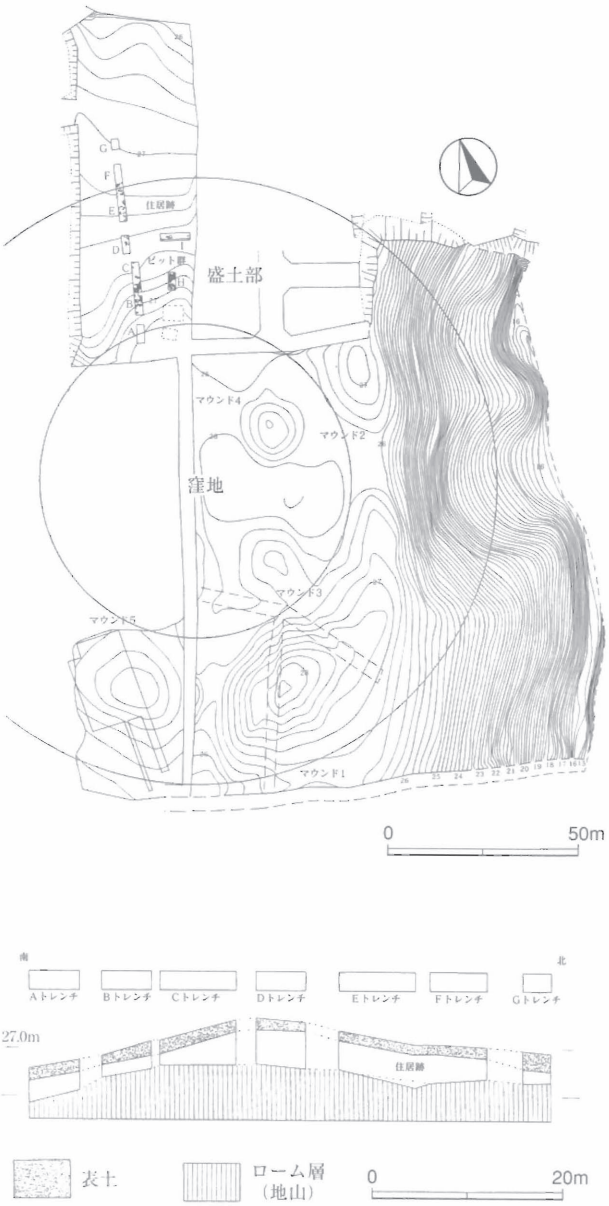
炉跡は，中央よりも入り口寄りに位置する。当時の訪問者の視点を復元すれば主柱穴が６本の場合は，入り口から室内に入ると，すぐ柱がみえ，炉はその柱の陰に位置している。この炉は床面を皿状に掘り込んだだけの構造である。

ｃ．床面

床面は，硬化が弱く，軟弱な場合が多いが，炉の周辺などに被熱による硬化が見られるケースも存在した。またSI－029からは，炉の周りから炭化した網代状の敷物が出土した。

ｄ．出土遺物

住居跡からの遺物は，住居の規模と比較すると非常に少ない。それは，遺物が床面近くの黒色土内からしか出土しないためである。SI－004，SI－022のような



第５図　井野長割遺跡平面図と土層断面概念図
（小倉2002を改変）

建て替えが多く行われた住居においては，出土する土器の時期幅が広く，時期の特定が難しい。

３．同時期の遺跡との比較

これまで，遺跡を構築する盛土，貝層，住居跡の説明を個別に行うことで，三直貝塚の構造を説明してきた。

ここでは，千葉県内で発掘調査が行われているいくつかの縄文時代後晩期遺跡と三直貝塚とを比較することにする。

（１）盛土遺構

近年，佐倉市井野長割遺跡の調査が行われ，概要ではあるが，盛土遺構のデータが公表されている（小倉2001，2002）。盛土遺構は，広場状の凹みを環状に巡る部分とその内側にマウンド状に高まる部分が存在する。外側の環状に巡る盛土遺構は，土を盛った部分は斜面に行くほど発達しており，平坦地に土を盛ったのではなく，斜面に土を盛っている様子が見られる。盛土はローム質の土で形成されている地点が多い。

マウンド状の地点については，1か所，1983年に発掘調査が行われており，盛土の下から土器が集中して廃棄された痕跡や，住居跡などが検出されている。

斜面方向に盛土が厚くなるという傾向は，三直貝塚との類似を見るが，斜面の盛土を構成する土がローム質土で構成されている点に違いが見られる。

（２）埋められた住居

房総半島の東京湾沿岸に分布する環状貝塚の中で，断面構造が公表されている例として，千葉市加曽利南貝塚がある（杉原1976）。

貝層の断面を観察すると，貝層の南側の断面には，貝層の中程に底面が平坦に整えられた掘り込みが確認できる。その掘り込みは褐色土と黄褐色土によって埋められ，高く盛り上げられており，三直貝塚において，住居跡がローム質土によって埋められている例と構造的によく類似している。

（３）住居跡，ピット群

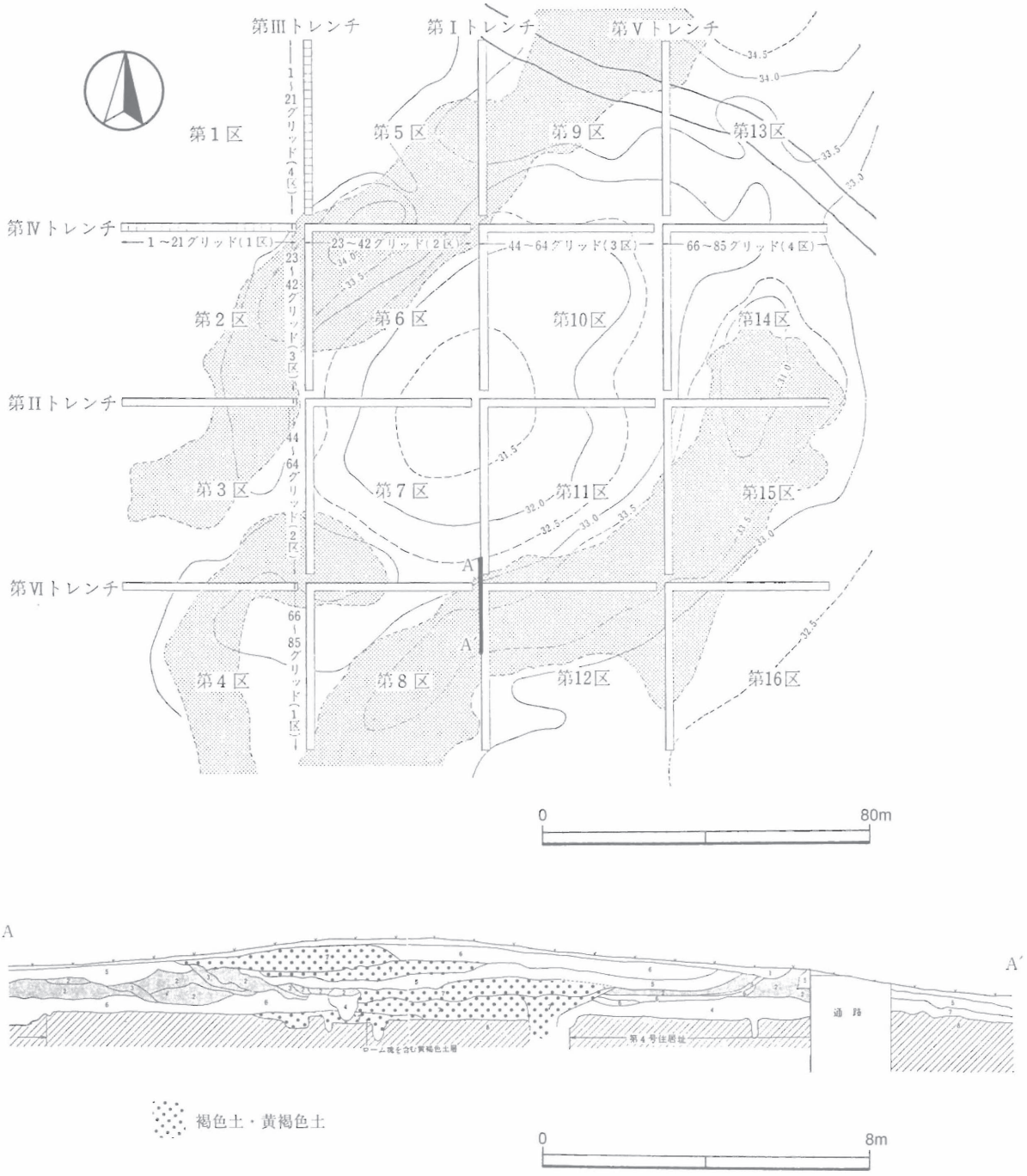
佐倉市宮内井戸作遺跡，市原市根田祇園原貝塚などの縄文時代後晩期遺跡においても，三直貝塚と同様にピット群が確認されている（財団法人印旛郡市文化財センター 1998，財団法人市原市文化財センター 1999）。またこれらの遺跡においては，総じて大型の住居が検出されており，その規模も三直貝塚例よりも大きい。近年調査された君津市鹿島台遺跡からも，加曽利Ｂ式期の大型住居が検出されている（白井・小林2002）。この遺跡は，小糸川を挟んで三直貝塚の対岸に位置しており興味深い。

４．小結

これまで，三直貝塚の遺構の概略を述べ，類似する例を県内の遺跡からいくつか拾い出し，比較を行った。

盛土遺構，大型住居，多量のピットといった要素は，三直貝塚に限定された要素ではなく，大規模な縄文時代後晩期集落の多くに存在する可能性があると考えられ，縄文時代後晩期の遺跡を見るときには注意が必要である。

今回は，三直貝塚の遺構の概要について簡単に紹介することを目的としたため，それぞれの遺構の形成過



第6図　加曽利南貝塚に見られる褐色土・黄褐色土の堆積
（杉原1976に加筆　目の細かい網かけは，貝層）

程や機能などの具体的な考察は行わなかった。また，それぞれの遺構と，他の遺跡の類例との詳細な比較についても，簡単に触れるのみとした。これらについては，本報告もしくは別稿を起こすこととしたい。

註

1）能城秀喜氏のご教示による。能城氏は，千葉県文化財センターの発掘調査以前より三直貝塚の踏査を繰り返され，貝層の分布状況や，西側斜面の崩落状況，断面の遺構などを記録しておられた。

文献

阿部芳郎　2002『縄文のくらしを掘る』岩波ジュニア新書　岩波書店

小倉和重　2001「4．井野長割遺跡－縄文時代のスペースデザイン，「円環の秩序」－」『財団法人　印旛郡市文化財センター　第5回　遺跡発表会　発表要旨』

小倉和重　2002「2．佐倉市井野長割遺跡（第5次）－盛土に表された縄文人の世界観－」『財団法人　印旛郡市文化財センター　第6回　遺跡発表会　発表要旨』

財団法人印旛郡市文化財センター　1998『千葉県佐倉市　宮内井戸作遺跡Ⅰ地区』

財団法人印旛郡市文化財センター　2000『吉見台遺跡Ａ地点』

財団法人市原市文化財センター　1999『上総国分寺遺跡調査報告書Ⅴ　祇園原貝塚』

財団法人君津郡市文化財センター　2002「－2．君津市－三直貝塚（KT076）」『君津郡市文化財センター　年報』№20

白井久美子・小林清隆　2002「縄文時代後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器－鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介－」『研究連絡誌』63

杉原荘介編　1976『加曽利南貝塚』中央公論美術出版

田川　良　2001「井野長割遺跡」『千葉県の歴史　資料編　考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県

日暮晃一　1999「花見川流域に形成された貝塚の諸特徴」『貝塚研究』4

吉野健一　2001「第3回最新出土考古資料巡回展に伴う講演会の記録集　（2）君津市三直貝塚の調査」『研究連絡誌』60

吉野健一　2002「三直貝塚」『平成13年度　千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会